

「人生をどう生きるか」構想する!

●浦高同窓会「地域職域同窓会責任者会議」を終えて
今日は 11 時半から浦高同窓会の「常任理事会」、
13 時半からは「地域職域同窓会責任者会議」でした。
会議の様子は同窓会会報『麗和』に譲ることとして、
木村恵司同窓会会長と杉山剛士浦和高校校長のご挨拶
の中で印象に残った言葉をご紹介します。

木村会長「この時期になると東大に何人受かった
という話が出されますが、私たち企業にとっては知識
を詰め込まれた人ではなく、グローバル社会の中
で知恵を働かすことのできる人材が必要なのです。
優等生ではなく、新しいことを起こせる人であり、
校歌の広き宇内に雄飛する人材であります。まさに
今、杉山校長の進めている教育がそうしたグローバル
社会で求められている人材育成の教育であると思
います。我々同窓会は、そうした母校の教育を少し
でもサポートできるように努力してまいります。」

杉山校長「まずは同窓会の皆様にお礼です。今年、
東大推薦枠で合格した生徒のことです。彼は、奨学
財団の支援を受けてウィットギフトのサマーセミナ
ーに参加し、さまざまな体験から自信を付けて帰国
し進路を見出してくれました。嬉しいことです。も
う一つ嬉しいことは、東洋経済新聞でさまざまな高
校の事が取り上げられましたが、それを書いた記者
から『私が子どもを通わせたいと思ったのが浦高で
す。その理由は、大学進学実績が取り上げられる中
で、生徒が自信を持って通っていることであり、浦
高には特異な文化があり、仲間同士の切磋琢磨が感
じられました。』とのお手紙をいただきました。今日
も 3 年生の 142 名が学校に来て仲間とともに追い
込みの勉強をしています。これからも同窓会の皆様
からのご支援、ご協力をお願いいたします。」〔要点〕

私たちの高校時代とは全く異次元の話に聞こえる
部分もありますが、浦高教育が次代のリーダーを育
むものであることの一貫性は変わっていませんね。
この杉山校長が、アメリカで体験した大学入試の形
を日経新聞で次のように書かれています。

* *

◆「人生の構想」描かせよ【日経新聞 1 月 30 日】

米国大学の入学者選抜の実情を視察した埼玉県立
浦和高等学校の杉山剛士校長は、日本の高校は生徒
に「人生の構想力」を身に付けさせる教育が必要だ
と指摘する。

◇ ◇

■米国の大学入試に学ぶ

昨夏、民間教育団体が企画する研修に参加し、米
国の大学 8 校を視察する機会を得た。そこでは実際
に入試を担当するアドミッション・オフィサーの話
や日本人留学生も含む学生の体験談を直接聞くこと

ができた。現在進行している高大接続改革も、米国の
制度を下敷きにしている面がある。

以下、米国での見聞で現場の高等学校長として感
じたことを踏まえ、我が国の高大接続改革への示唆
について述べたい。

まず驚いたことは、米国の大学入試ではエッセー
が重視されていることだ。合否を決める選考資料は
表のとおりいくつかあるが、最も重要なものはエッ
セーである。エッセーというと、随筆のようなもの
と勘違いしていたが全く違う。それは志願理由書で
あり、「人生の構想図」である。自分とは何者か。高
校時代の達成体験や挫折体験から何をつかんできた
か。そして自分は社会や大学にどのように貢献でき
るか——。つまり「どんな人生を構想するか」を徹
底的に考え、一つのストーリーとして表現・発信す
るのである。

現地で学ぶ日本人留学生が異口同音に語ったのは、
エッセーを書く作業が自分のキャリア形成で極めて
重要な意味をもったということである。ある留学生
は「ふらふらと大学に入る日本の高校生と米国の高
校生の一番違うところ」と言い切り、別の留学生は
「もし日本に戻って教員になったら、夏休みの宿題
で生徒にエッセーを書かせ、それを徹底的に添削し
たい」と語った。ハーバード大に合格した受験生の
エッセーを集めた本が売られていたが、決して付け
焼き刃ではマネできない、それぞれのパッションが
感じられた。〔中略〕

「一度しかない人生を君はどうしたいと考えてい
るか」。この問いに対する答えは、学年が上がるにつ
れて変わっていくかもしれないが、その時々でいつ
でも語れる準備ができている高校生を育てることが
重要である。そのためには、日々の授業において、
様々な事象について深く考えさせるとともに、自分
の考えを自由に発信し他者と対話を重ねる機会を意
識的に増やしていくことが必要である。まさに「主
体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」
である。

また、学校内外において高校生の心に火をつける
ような、本物や一流との出会いの機会を積極的に設
けることも大切である。時には、自分が慣れ親しん
だ境遇とは違う、多様で異質な他者との出会いの機
会を提供することも意義深い。

同時に大学側も受験生の「人生の構想力」を見抜
くために、また人材の多様性を確保するために、ど
れだけ入試にエネルギーを投入するのか、覚悟が問
われている。現在、高大接続改革が進んでいるが、
制度変更の表面だけにとらわれるのではなく、米国の
精神に学びつつ、日本の教育の良さも生かした地
に足のついた改革となるよう務めていきたい。

* *

私たちにも「人生を君はどう生きるのか?」の問いが…。